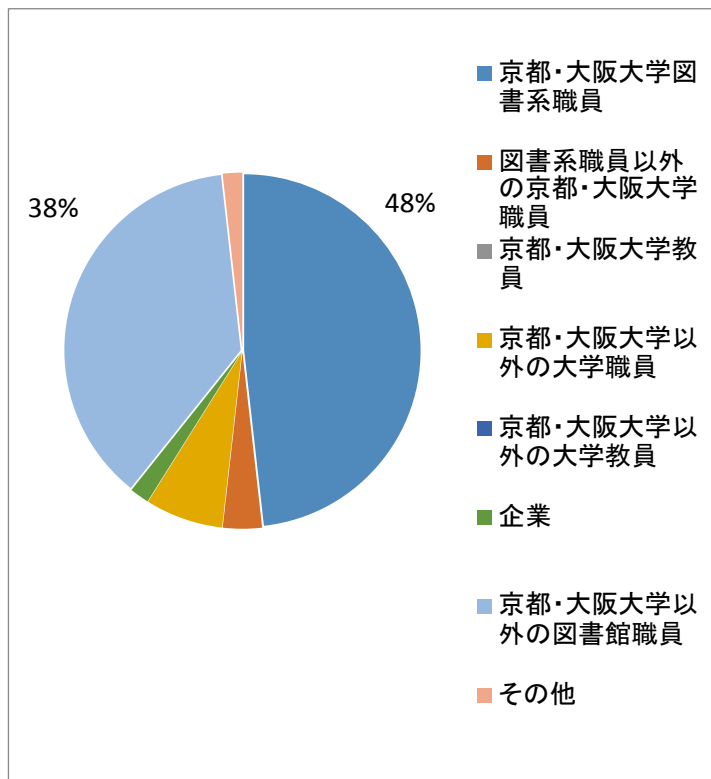


平成28年度 講演会：「オープンサイエンス推進状況下での大学図書館の役割を考えるーオープンアクセスの推進と研究者IDの動向ー」 アンケート結果

研修実施日：2016年10月21日（金）
 参加総数：85名
 アンケート回答数：56名（回答率：65%）

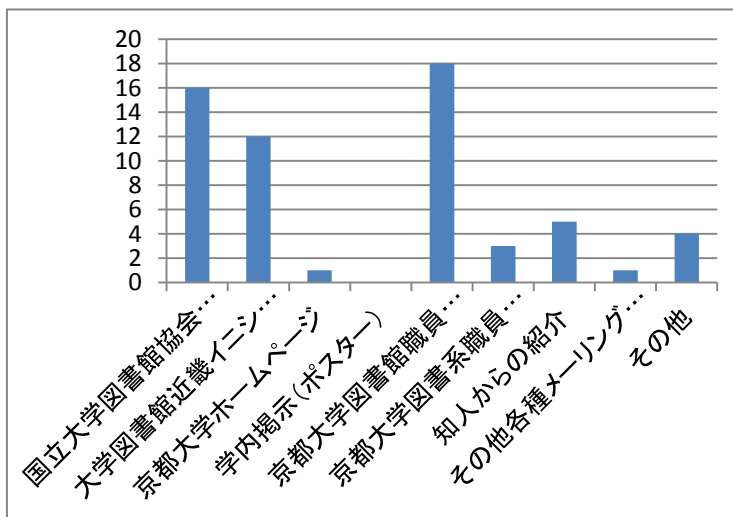
<1.参加者の所属>

a) 京都・大阪大学図書系職員	27 名
b) 図書系職員以外の京都・大阪大学職員	2 名
c) 京都・大阪大学教員	0 名
d) 京都・大阪大学以外の大学職員	4 名
e) 京都・大阪大学以外の大学教員	0 名
f) 企業	1 名
g) 京都・大阪大学以外の図書館職員	21 名
h) その他	1 名



<2.本講演会を知った情報源（複数回答可）>

a) 国立大学図書館協会参加館への案内	16 名
b) 大学図書館近畿イニシアティブ参加館への案内	12 名
c) 京都大学ホームページ	1 名
d) 学内掲示(ポスター)	0 名
e) 京都大学図書館職員メーリングリスト(Staff-ML)	18 名
f) 京都大学図書系職員研修ページ	3 名
g) 知人からの紹介	5 名
h) その他各種メーリングリスト	1 名
i) その他	4 名



* その他の内訳(上司からの案内、他の図書系職員(研修担当)の紹介、機構内周知)

<3.講演に対する意見・内容> (主なご意見)

講演1「オープンアクセス、オープンサイエンスの展望と研究データ利活用促進ならびに大学運営から見た大学図書館への期待」(林 和弘 氏)

オープンデータははたして図書館職員がたずさわれる職域なのか？(データキュレーターとしての技能の必要性、別途専門技能者を雇用する可能性)

データやジャーナルがオープンになる環境が整えられつつあるが、そこにスムーズにアクセスし、利用、活用できることが重要であり、それらのデータ・ジャーナルをどうみせるか(例：大学機関リポジトリ)は大学図書館に期待されることの一つかな、と話を聞かせていただきました。

オープンサイエンス、データの時代を前提とした図書館とそれらを取り巻く様々な主体のネットワークをどのように考えるかについて、様々な見取り図が提示され興味深かったです。【他 17名】

配布資料が少なく(A4一枚のみ)スライド資料が多かったので、もし可能ならばスライド資料(PowerPoint?)も印刷して配布していただけたらもっと良かったかなと思います。【他 3名】

大変化時代のように思いますが、原則学術情報を保存する、利活用してもらうように行動すれば大丈夫かと思いました。

団体や用語など聞きなれないものが多かったが、色々な立場の人々がオープンサイエンスに取りくんでいることが分かった。

内容がぎっしり詰まっていたので、もう少しじっくり聞きたいと思いました。非常に刺激的な内容で興味深く拝聴しました。

(勉強不足なのですが)新しくお伺いする話ばかりで、新たな知見を得ることができました。

図書館職員として、学術情報流通の変革に貢献したいと思った。

世界のトップでも議論されており、重要性が高まってきていると感じた。

この図(データのピラミッド)が現状を見通すのに分かりやすかったです。

幅広い範囲でのお話をいただき、目先のことばかりではなく環境の変化にも目を向けて、業務にあたっていきたいと思いました。

前向きなメッセージを頂けて良かったです。

研究データの共有化と世界への発信に図書館として深く携わっていくことが今後重要であると考えさせられました。

オープンサイエンスを考えるときは、キャンパス中に留まっていけないという視点になるほどと思いました。オープンアクセスは通過点なんですね。

5-10年後先を見すえた話ということで、特に企業や一般の方へサイエンスが波及していくという文脈をお聞きでき、勉強になりました。

広い時代のスパンで図書館活動の本質を見ておられ、非常に刺激になりました。【他 1名】

いずれオープンデータ・論文の保存性、半永続アクセスの保障の問題が出てくると思いました。特にゴールドはバックファイルを保持できるようになると安心かと思いました。

オープンサイエンスのムービングに伴い、図書館側もより上流の研究支援を行う必要があることが印象的だった。

講演2「研究者識別子と名寄せーオープンサイエンス時代の学術情報環境の構築ー」(蔵川 圭 氏)

以前、同一の研究室で同じ研究領域で名字が同じ、名前のイニシャルが同じというケースがあった。こうなるとキュレーターでも識別が難しく、著者本人による識別子登録が必要ではないか。

研究者識別子・品質←人的機械的名寄せにより維持という点。図書に比べ、論文の数が膨大であればあるほど、精度の高い識別子を付与しなければならない。という説明が興味深いです。重複問題もしかり。

研究者識別子と名寄せに関する最新の動向、課題について色々なお話をきけてよかったです。なぜORCIDなのか(VIAFのような他のプロジェクトではなぜダメなのか)について、もう少し突っ込んでききたかったです。

KAKENIは日本で広く使われているけどORCIDに思いきって一度に転換させるのが良いと思いました。国家権力でとか。

名寄せがこんなに奥が深いとは知らなかったです。なかなかはかどらないことが分かりました。研究者IDのいろいろな情報も知れてよかったです。

クラスタリングによる名寄せが行われているということで既に機械学習が実用にされているのが分かった

識別子と名寄せの違い、性質がよくわかりました。数学的な説明興味深かったです。

ORCIDは中心的な研究者識別子になっていくということですが、分野によっては日本では科研費番号がまだまだ普及率が高いと思います。研究者でもデータベースセンターでもない図書館員が学内の研究者業績DBのIDを含めて研究者識別子を管理する場合は、研究者リゾルバーのような機能を追加して、エコシステムとして使用できればよいなと思いました

各識別子をブリッジの役割を果たしている識別子に統合する流れかと思いましたが、そのような単純なものではないということがわかり、興味深かったです。

研究者識別子について、基礎的な部分からの説明をいただけよかったです

研究者識別子について個々の存在はいくつか知っていたが、PIDのブリッジ機能のことはよく知らなかったです。

ORCIDを始めとして様々な識別子があるが、位置づけやそれらの違い、そして今後の見通しを整理することができた

研究者名寄せの複雑さ、大変さがよくわかりました。同時に著者名典拠の品質の高さを再認識しました。NACSIS-CATを簡易化する動きがありますが、品質保持の重要性を強く言いたいと思います。

学術成果の寄与者が記されることに対する大切さを話されたことが印象的でした。研究者が関心を持っているテーマでもあり研究者の方も聞きたいお話だと感じました。

名寄せの問題は古くて新しい、と改めて感じました。機械学習の話は興味深いものでした。

研究の貢献度を示す手段としての名寄せというのは、わかりやすかった。これは実務的にも可能なので、ぜひ進めていきたい。

質疑応答の様々なマイナンバーのくだりによって、蔵川様の技術的な内容に展望の面からも深く理解ができたと思います。

研究者識別子が増える度に名寄せ作業が必要になるのかな、と思いましたが、基準となる既存データが存在すれば、と思いました。

オープンサイエンスとともに研究者の識別が重要になるのは、公に資金的供給のため名寄せが必要ということと、純粋に研究内容の区別をするために同人物か区別が必要という二面性があるのを教えて頂きました。

研究者IDと名寄せの重要性を、自分だけでは難しいレベルで理解できました。

名寄せの方法で、学術知識空間Cから抽出できるXCの使い方等をもう少し詳しく知りたかった

PIDの説明がわかりやすく、関心が強まりました。

事例報告「京都大学のオープンアクセス推進の取り組み」(富岡 達治 氏)

強制力がなければ登録数は増えないと思うが、(教員サイドからの) トップダウンでなければ難しいだろうと考える。

あらためて、オープンアクセスポリシーの方針採択の経緯を見て、そのスピーディーさに驚きました。この勢いと、京大の将来構想における推進事業における位置付をもって、さらに登録数の増大利活用につながると感じています。

OA方針の採択、リポジトリ登録システムといった制度の流れとそこに関わる課題についてよく理解できました。

KURENAIのランキングがとても高いことに感心しました。世界ランキングで41位、アジアで1位！！とても素晴らしいと思いました。

京大の取りくみがまとめてよく分かりました。

著作権ポリシー確認、データキュレーターなどの役割があることが分かった
KURENAIとオープンアクセス方針についての要点が簡潔にまとめられており、短時間のご講演ながらよく理解できました。
リポジトリ登録システムが独自開発だと知り頼もしく感じました。
リポジトリの連携の図や、登録フローの図により、実際の運用がよくわかった
オープン化ということで、貴重資料画像の公開も進める、というのがいいと思った。
OA方針採択後の実装への取り組みにいろいろな方法で取り組んでいらっしゃるということがわかりました。
研究者や職員の方がいかに手をかけずに、今あるものを利用するのか、という所が印象的でした。
オープンアクセスについての図書館の実際の取り組みを聞くことができよかったです。しかし説明会や著作権ポリシーの確認など業務が大変そうで本学では実現できそうにありません。日本を代表する大学でどんどんOAに取り組んでいってもらえると日本にとって大変ありがたいことで期待しています。
Dspace以外にリポジトリ登録システムがあり、教員ご本人が登録できるということに驚きました。
京大さんのKURENAIはいつも参考にさせていただいております。オープンアクセスの方針も参考にできればと思っています。
リポジトリ登録システムがJAIRO Cloudでも使えれば、と思いました。
オープンアクセス化を大学で採択してもまだ学内でのオープンアクセス化がそれほど進まないということで、公に採択しても認知度を上げるのは大変であると思いました。
学内外との連携の部分がもっと知りたかったです。
リポジトリのメリットが先生にダイレクトにあれば登録数も増えるかと思いますがなかなか難しいと感じました。
学長等のトップダウン方式が重要であるとの感想を持った。
採択まで1年強とスピーディですばらしいと思った。

<4.印象に残った一言>

講演「オープンアクセス、オープンサイエンスの展望と研究データ利活用促進ならびに大学運営から見た大学図書館への期待」(林 和弘 氏)

研究「成果」の共有・利活用
電子化の時代に図書館へどのような非連続変化が起こるか
過渡期と変化の加速
SciHubは究極のオープンアクセス
世紀のチャレンジを楽しもう（最後のスライド）
研究活動自体のモニター
不連続変革
同床異夢
汎用型、ドメイン型
Movement of Open Science
科学・産業・市民を変えるオープンサイエンス
ネットワーク化にはID（識別子）が重要
次世代科学の創出に携わる世紀のチャンスを楽しむ【他 1名】
オープンサイエンスは平時には研究への貢献度を図ることができる。
データのピラミッド

市民が科学技術に参加することができる【他 1名】
アレクサンドリア図書館の船舶版に象徴される「情報を集めることの重要性」【他 1名】
チャンスをのがしてはいけない
オープンサイエンスというキーワードを使って新しい枠組みを作る、再構成していくというようなこと【他 2名】
ネットワークは双方向である
4. できることからビジョン構築へ
ゲーテンベルグの時と同じ状況
オープンアクセス化は一部の組織では、必要な所では勝手に進んで実施されている
シチズンサイエンス
日本の政策では、研究成果をオープンにすることだけでなく、その利活用が提唱されている。【他 1名】
研究成果のGKから研究のパートナーへ
ゲームチェンジの兆し
非連続変化
EJのゲートキーパー (GK)
ポストゲーテンベルク
研究成果のGK (ゲートキーパー) から研究のパートナーへ

講演2「研究者識別子と名寄せーオープンサイエンス時代の学術情報環境の構築ー」蔵川 圭 氏)

KAKENとORCIDがブリッジとして並走しているので吸収してDBを構築する必要がある。
研究者識別子、学術環境のオープンデザイン
学術文化の継承をしていることを常に意識し、我々は行動する必要がある【他 6名】
名寄せの精度高いのはハイブリッド。人手と機械をうまくミックスするのが大事。【他 3名】
ある分野の研究成果が別の分野の成果を導出する可能性
複数のデータベースの統合利用には、共通の外部識別子がブリッジ機能を果たす【他 1名】
ORCID
オーソリティを高める工夫
姓名の記載は貢献の明示ではない
識別子は本来一つあればいい。【他 1名】
研究者自身は増えているが、FTEは横ばい
研究者識別子は品質が重要
世界最初の論文が1665年に登場
著者のクラスター化
あらゆる学術知識は、それに貢献した者の存在と貢献の度合が明示されるべき
サイエンスを行うことがオープンである、というデザイン
研究者の名寄せアプローチはまだ100%には達していない
名寄せ
識別子には目的があって、それぞれ異なる
研究者IDの付与は研究への貢献度の可視化である

学術のオープンデザイン
研究者識別子がORCIDの果たす今後に期待される
2つの研究者番号の統合
国際的なPID
「学術環境をファシリテイトするのが、大学図書館のミッション」（質疑にて）
名前空間からは研究者の情報（貢献）へ戻れないが、識別子からは戻れる

事例報告「京都大学のオープンアクセス推進の取り組み」(富岡 達治 氏)

オープンアクセスの理解と促進（併せて、たずさわる職員の人材育成）【他 2名】
OA方針採択により一気にリポジトリ登録がふえたわけではない
今年の10月でちょうど10年。世界ランキングで第41位。すごい！！
ORCIDの検討を開始している
日本で1位
KURENAIの本文登録数は日本全国の8%を占める
登録数はかろうじて増加している【他 3名】
独自開発
京都大学図書館職員ですが、学内者でありながら体系的に理解できていなかった。OA推進事業が理解できました。
KURENAI
大学としてOAポリシーを持つことの重要性を認識してから1年少しで京大OA方針を採択した。【他 2名】
登録数がふえない
教員（研究者）にオープンアクセスの必要性を図書館員が説明していくこと
登録したくなる動機付け、ということではなく、研究者として当然のことである【他 3名】
登録する教員の手間を少なくしたい
学生へのオープンアクセスの理解促進【他 3名】
リポジトリ登録システム

<5.その他、本日の講演会全般について意見等>

オープンデータ、オープンサイエンスという潮流は、実際にデータを生み出す研究者側でどの程度認知されているのか、どういう態度で向きあっているのかが知りたい。
申込時に質問があれば、ということだったので書いていたのですが、全く触れられず残念でした。
国（文科省）が大学図書館に対して要望していることを大学関係者に説明する機会に小規模大学の図書館にいると恵まれないので国立大学でこのような講演会をしてもらえると少しは知るきっかけができて大変助かります。
IRをより全体的に大きくとらえることができとてもおもしろかった。日常的には登録業務などの実務だけにおさまりがちなので、本日の内容のようにオープンサイエンスの大きな進ちょくの今を知ることができてよかった。

<6.今後、講演会でとり上げてほしいテーマ等>

大変勉強になりました。どうもありがとうございました。今後もScience系オープンアクセス等を議題にとり上げて、色々ご教示いただけましたら幸いです。

RDAの米国大学の対応。新NCR

CAT2020

著作権処理の実務、Creative Commonsの背景と実務など。

ILL関連。各大学での価格差などについて実務的なもの

他大学の事例等も、たくさんお聞かせいただけるとありがたく存じます

学術情報流通の最新動向

アクティブラーニング

学内の研究推進課・支援室との連携、将来構想について